

公共建築物探訪。

市内には、機能だけでなく建物としても、魅力的な公共施設が数多くあること、ご存じでしたか？特に中心市街地には、文化、スポーツ、産業など様々な分野の公共施設が集まっています。そしてこの4月には、新たに豊田市博物館がその仲間入りをします。この特集では、今後ますます魅力的になる、中心市街地西エリア周辺の公共建築物を訪ねます。



美術館

美術館建築で名高い建築家・谷口吉生^{たにぐち よしお}氏が設計した美術館は、全国的にも有名な豊田市の公共建築物の一つです。水平に広がる建物に対して壁に隠れた控えめなエントランス、展示室ごとに異なる空間造りや使用する材質へのこだわりなど、美術作品に向き合うために考え抜かれています。

また、大きな池のある庭園には屋外彫刻作品が点在し、散策を楽しむこともできます。

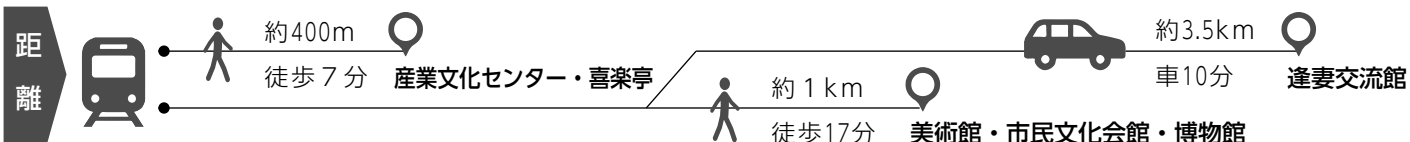


基本データ

- 所在地 小坂本町 8-5-1
- 開館時間 午前10時～午後5時30分(入場は午後5時まで)
- 休館日 月曜日(祝日は除く)、展示替えの期間、年末年始
- 駐車場 248台
- 問合せ ☎34・6610、FAX36・5103
✉bjjutsukan@city.toyota.aichi.jp



ホームページ



市民文化会館

敷地内地面から外壁、さらには内壁まで同じレンガ材を使用したどっしりとした見た目が特徴の建物。広場の中央に立つと、傾斜のついた壁がいくつも重なった複雑な構造になっているのがよく分かります。

屋内に入ると、ロビー正面の大きな壁画が目を引きまみやながたけひこす。宮永岳彦氏原画による綴錦織で、横幅は28つづれにしきおりメートルあります。この綴錦織という技法は、古代エジプト王の墓から見つかった織物にも多く見られるそうです。そう言われてみると、施設の外観が砂漠のなかのピラミッドのように見えてきませんか・・・？

また、天井の高さが段違いだったり、外だけでなく中の壁まで傾斜がついていたり、不思議な隠れ家感にわくわくする内観。久しぶりに訪れると、それまでの記憶とは違った楽しみ方が見つかるかもしれません。



基本データ

- 所在地 小坂町12-100
- 開館時間 午前9時～午後9時30分
- 休館日 月曜日(祝日・振替休日は除く)、年末年始
- 駐車場 519台
- 問合せ ☎33・7111、FAX35・4801



ホームページ

産業文化センター・喜楽亭

産業文化センター



喜楽亭



地上5階地下1階建ての複合施設として昭和60年に開館したのが、産業文化センターです。幾何学形態の組み合わせによって未来をイメージした外観。メタリックなタイルが太陽に照らされると、海面のようにキラキラと光ります。内装は対照的に、やわらかいベージュ系のタイルや石などの自然素材を用い、親しみやすい空間造りを目指したものになっています。

同敷地内には、和風建築 喜楽亭があります。明治後期から昭和42年まで続いた料理旅館で、現在の神明町にありました。廃業後は住居として使用されていましたが、昭和57年に所有者から市へ寄贈され、現在の場所に復元移築。その際、3分の2の規模に減築となりましたが、大人2人が優にすれ違うことのできる広い

廊下などから、この建物が旅館であったことが分かります。

今もなお、釘などの使用を最小限にとどめた建築当時の工法を受け継ぎながら修繕を繰り返し、古くからの姿を現代に残しています。

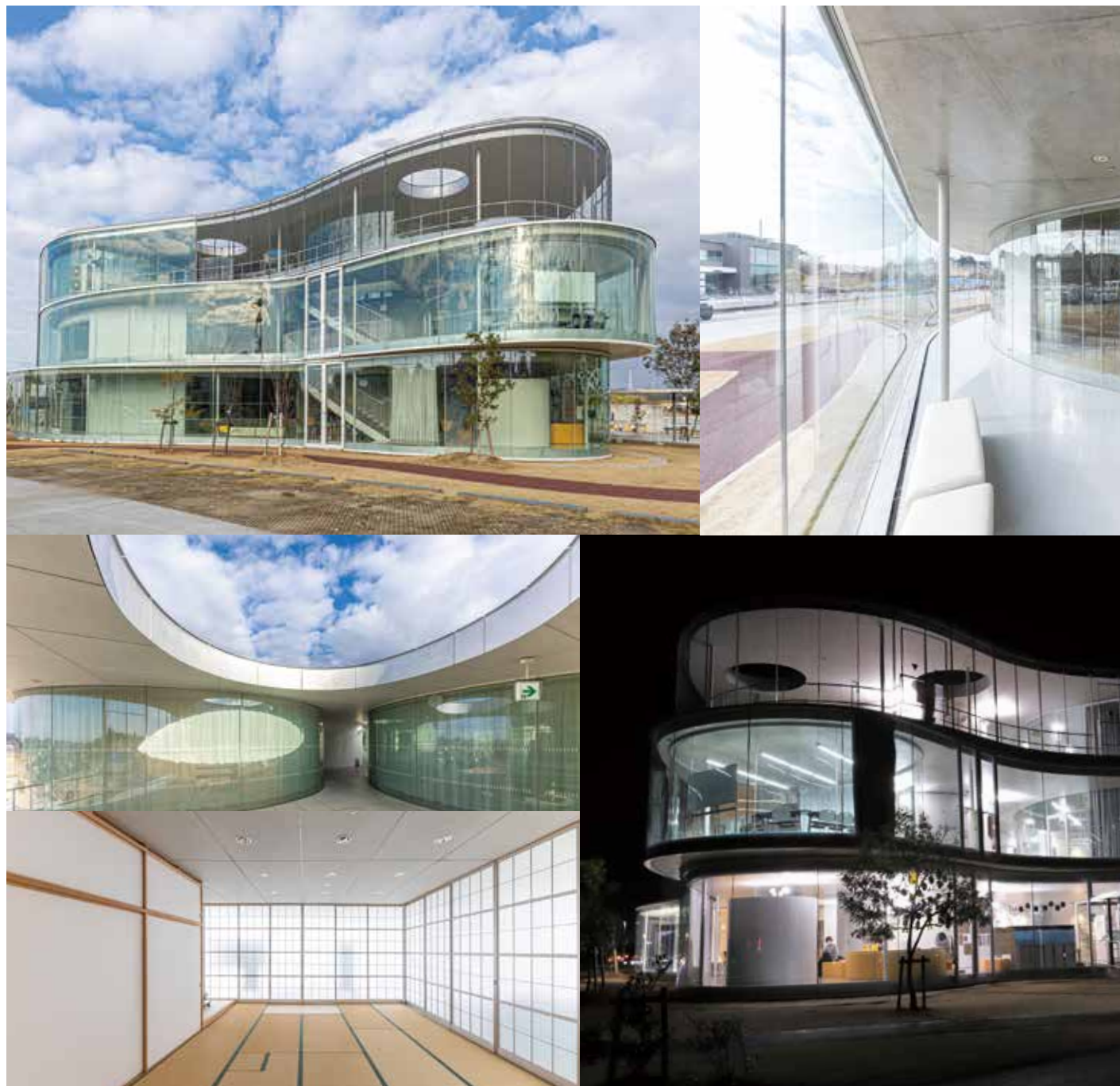
基本データ

- 所在地 小坂本町1-25
- 開館時間 産業文化センター：午前9時～午後9時30分
喜楽亭：午前9時～午後5時
- 休館日 産業文化センター：月曜日（祝日・振替休日は除く）
喜楽亭：月曜日・祝日・振替休日、年末年始
- 駐車場 276台
- 問合せ ☎33・1531、FAX33・1535



ホームページ

逢妻交流館



中心市街地から西方向に少し足を延ばしたところに、ご紹介したい建物がもう1つあります。全国の建築ファンが豊田市美術館と合わせてよく見学に来るのが、この逢妻交流館です。平成22年に竣工したこの建物を設計したのは、^{せじま かずよ}妹島和世氏。建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞の受賞歴のある建築家です。

逢妻交流館は、各階の丸い個室が少しずつずれた形で3層に重なって構成されています。その最大の特徴は、曲面ガラスにより構成された透過性のある空間。内部からは外部の風景が入り込み、反対に外部からは内部での活動の様子がよく分かるようになっています。3階は半屋外で、見上げると丸く切り取られた空が覗きます。自然と一体となり、季節や時間帯によって異なる美しさを

感じられる建物です。ぜひ夏と冬、朝と夜など雰囲気の違いを味わってみてください。

基本データ

- 所在地 田町3-20
- 開館時間 午前9時～午後9時
- 休館日 月曜日（祝日・振替休日は除く）、年末年始
- 駐車場 100台
- 問合せ ☎34・3220、FAX34・3400
✉ph-aizuma@city.toyota.aichi.jp



ホームページ

P2～5掲載の施設は、観覧料が必要な場合や、開館日であっても見学や利用に制限のある場合があります。詳細は、各施設にお問い合わせください。

4月26日(金)にいよいよ開館する博物館。

今回は、まだ建設中の今の様子を少し覗いてみます。



正面エントランスを入ると、吹き抜けの大きな空間。豊田市産の木材が使われた柱が並びます。ここは「えんにち空間」といって、パートナーや企業、学校とともに豊田市の歴史や自然、産業に関わる取組の成果を展示する予定です。天井の模様、何かに見えませんか？実は、豊田市章が隠れています。是非真下に立って探してみてください。

上/エントランス横の常設展示室には、高さ7.8mの展示棚があります。この日は空っぽの状態を見ることができました。棚いっぱい展示物が並び日がもう間もなくやってきます。

下/再生紙のパイプ(紙管)でできた壁の一部。紙管は軽くて強度が高く、災害用シェルターの設計などで坂氏が積極的に採用してきた坂茂建築を象徴する資材です。



博物館

建物の設計は、自然と調和した斬新なデザインで知られる坂茂氏。平成26年にプリツカー賞を受賞、同年にフランス芸術文化勲章(コマンドゥール)、平成29年に紫綬褒章を受章など、日本を代表する建築家の一人です。自然との共生や自然由来の材料を取り入れる坂氏の考えは、当館エントランスの木造屋根からもうかがうことができます。

庭園は、豊田市美術館の庭園を設計したアメリカのランドスケープデザイナー、ピーター・ウォーカー氏によるものです。隣にある美術館との繋がりがや一体性を持たせています。



設計当初に作成された模型。令和5年1月に開催した建設現場の見学会での公開後、開館までは朝日丘交流館で展示しています。

坂茂氏のコメント

豊田市は自動車産業を中心とした工業的な側面がありますが、一方、周辺町村との合併を行い、今では市域の70%が森林である自然豊かな地域です。それゆえに豊田市にとっては環境負荷を抑えながら、産業を育てていくかが社会的に重要なテーマであると考えます。今回の博物館の建築は、木造建築や太陽光発電などを採用し、新築の博物館で初めてZEB Ready*の認証を取得した環境面に配慮した建築です。そして、矢作川の氾濫等によって本庁舎が被災した際に、災害対策本部を設置できる防災拠点になる施設でもあります。

その博物館の象徴となる空間が、木造の「えんにち空間」です。豊田市産材の杉材で作られ、豊田市の市章が屋根の梁のパターンになっている大屋根が博物館の活動を包み込みます。そこでは日々様々なイベントが行われ、何度も市民が訪れ、来訪者と出会い、郷土愛を育む場所となる事を期待しています。

*エネルギー負荷の抑制や自然エネルギーの積極的な活用等の省エネルギー手法を用いて、建物で消費するとされる基準一次エネルギー消費量から、年間50%以上の一次エネルギー消費量を削減することができる建築物



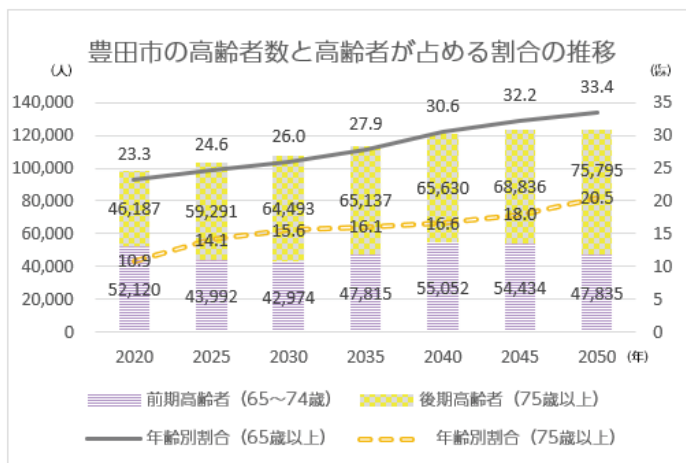
安心して 葬送できるミライのために



●問合せ 企画課(☎34・6602、FAX34・2192、✉kikaku@city.toyota.aichi.jp)
総務監査課(☎34・6706、FAX34・6755、✉soumu-kansa@city.toyota.aichi.jp)

来年2025年は、1947年～1949年に生まれた「団塊の世代」全員が75歳以上の後期高齢者になる年です。そして約2,155万人、国民のおよそ6人に1人が後期高齢者になると見込まれています。一方で労働人口が減少していく中、高齢者を支える力が弱まり医療・介護体制の維持が難しくなるなど、私たちが暮らす社会全体において様々な問題が起こるといわれています(いわゆる2025年問題)。

豊田市においても、2025年は、約6万人、市民のおよそ7人に1人が後期高齢者になると見込まれています。また、将来、高齢者数が増加し、全体に占める割合も高まると予測されています。



(出所) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(令和5(2023)年推計)」

今後も、高齢者が安心して自分らしく暮らせる社会にすることが求められています。また、寿命などで亡くなる人が増えていく中で、全ての人の尊厳が亡くなってからも守られるよう、様々な課題に向き合っていくことが大切です。

その課題の一つとなっているのが「火葬場の不足」です。既に東京都を中心とする首都圏では亡くなってから火葬するまで数日待つことも珍しくないといえます。では、豊田市にある火葬場「古瀬間聖苑」はどのような状況か見ていきましょう。

古瀬間聖苑を取り巻く状況

設置運営

現在の古瀬間聖苑は、1989年に豊田市と東西加茂6町村が共同で設置しました。2005年に豊田市が東西加茂6町村と合併してからは、豊田市と三好町の共同運営となり、2008年からは、みよし市の火葬を請け負いながら、豊田市が単独で運営しています。火葬炉12基などを備えた、豊田市民やみよし市民が利用する火葬場ですが、運営に支障のない限り他自治体の住民の火葬も受け入れています。



※1 三好町、藤岡町、小原村、足助町、下山村、旭町 ※2 藤岡町、小原村、足助町、下山村、旭町、稲武町 ※3 2010年からみよし市

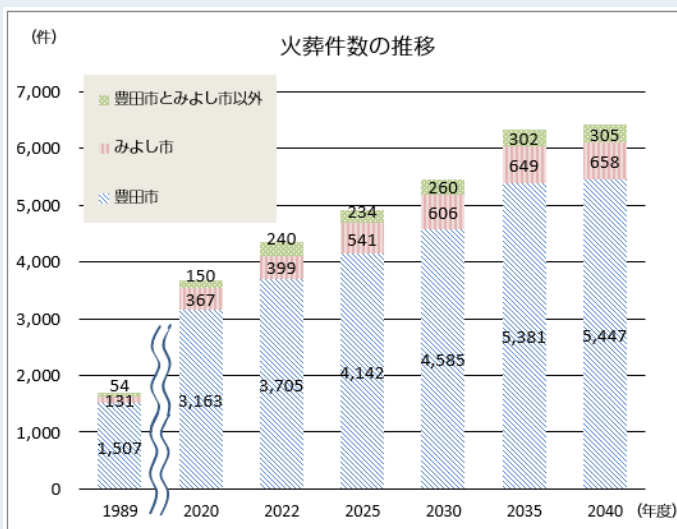
火葬の状況

開設以来、火葬件数は増加し続けています。2022年度は4,344件で、開設した1989年度と比べて約2.6倍でした。

例年、冬期や友引明けに件数が増える傾向があります。一日あたりの対応可能件数は最大で24件を目安としていますが、2022年12月と翌年1月の2か月のうち、24件を超える火葬をした日が5日ありました。

さらに高齢化が進む中で、2040年度には豊田市民とみよし市民の火葬だけでも6,100件を超えると予測しています。これは2022年度と比べて約1.5倍です。現状のままでは増加する

火葬件数に対応することが困難になり、首都圏の状況と同様に、火葬するまで数日待つことも予想されます。



今後に向けて

豊田市以外の状況として、名古屋市は2025年から、2か所ある火葬場の一つ「八事斎場」を再整備のため一時的に閉鎖することや、名古屋市民の火葬場利用を優先する制度を導入することを決めています。

その結果、前述のように高齢化の進展により火葬件数が増加するほか、名古屋市の火葬場ではなく古瀬間聖苑での火葬を希望する近郊市町の住民の数が現在の見込み以上に増加し、豊田市民やみよし市民は、特に冬期や友引明けの火葬予約がますます取りにくくなることが予想され、課題になってきます。

そのため豊田市は、みよし市とその課題解決に向けた協議を進め、亡くなった人の尊厳を守り将来にわたって安心して葬送できる火葬事業の在り方について考えていきます。